

[国 語]

文学作品を評価・批評する学習過程の工夫

－『走れメロス』の実践を通して－

栗田 和恵*

1 問題の所在と主題設定の理由

平成29年度告示中学校学習指導要領の第3学年B書くことの言語活動例には、「関心のある事柄について批評するなど、自分の考えを書く活動。」が示されている。また、C読むことの言語活動例では、「詩歌や小説などを読み、批評したり、考えたことを伝え合ったりする活動。」が示され、「思考力、判断力、表現力等」の「書くこと」「読むこと」の二つの領域で「批評」する言語活動例が示され、中学校の最高学年において習得すべき力が「批評」であることが分かる。しかし、当校3年生に、いざ「批評」する活動や「批評文を書く」となると、感想や考えを述べるにとどまり、「批評」というレベルに到達しない場合が多くみられた。中学校3年生において、「批評」する力を習得するために、中学校2年時の後半で、「批評」するという学習を行うことによって、文章を評価する力や批判的思考力が芽生え、中学校3年時での「批評」することが高いレベルでスムーズに行えるのでないかと考え、本研究を行った。

では、「批評」とはどのようなことをいうのか。平成29年度告示中学校学習指導要領解説に、「批評」とは、「対象とする物事や作品などについて、そのものの特性や価値などについて、根拠をもって論じたり評価したりすること」と定義されている。また、糸魚川市で使用している3年生の現行の教科書（光村図書）巻末にある「文学的な文章をよむために（物語・小説）」には、「批評」とは「作品を読み、作品そのものの特徴や、描き出されている人間の姿、社会の在り方について評価することを批評という。」とあり、続けて「作品の中の表現を根拠にして、自分の現代社会の在り方などと比較しながら論じるとよい。」とある。「批評 観点を立てて分析する」の教材には、「上達のポイント」として、「・物事の役割や目的を踏まえ、重要だと思うことを観点として立てる。・観点ごとに観察したり、類似のものと比べたりして、特徴を分析する。」と示されている。「説得力のある文章を書こう」の教材は、ポスターなどの非連続型テキストを批評するというものである。ここでは、批評文とはどのようなものかと説明した後に、「評価するための観点を立て、根拠を明らかにして述べる。」ものとしている。教材によって、「批評」する対象が、文学作品であるか、社会的な事象であるか違いはあるが、これらのことから、批評とは、「作品の特徴や価値について評価すること。作品の表現を根拠にして、評価すること。観点を立てて、比較して特徴を分析すること。」であると捉えた。

そこで、本研究では、『走れメロス』（太宰治）を批評するという学習を実践する。この作品は、シラーの詩『人質』を原作にしたものである。『走れメロス』と『人質』を比較すると、物語のタイトルだけでなく、構成や登場人物、人物像、主題、文体など多くの共通点や相違点などを見出すことができる。そのことは、批評する際の観点を設定しやすいということ、また原作と比較しながら読むことができ、作者はなぜこの表現や言葉、場面を入れたのか、意図を考え分析することにつながると考えたからである。また、課題を解決・分析することを通じて、文章を批評する力が芽生え、自分の読みの深まりを自覚化し、文学作品を読むことの観点を獲得していくであろう。また、仲間と考えを伝え合うことを通して、多様な考えに触れ、文学作品を読むことの楽しさを実感していくであろうことを生徒の姿から実践的に究明していく。

2 研究の目的

本研究の目的は、文学作品を比較して読むことで、言葉や表現に着目し、文章を批評する力が高まることを、実践を通して検証する。また、「批評する力」を高めるために、学習過程に何が必要であるか検証することである。

3 研究の内容

(1) 比べ読みによる作品の特徴の把握・・・作品の価値や特徴を考える。比較して分析する。

『走れメロス』と『人質』を比較すると、物語のタイトルだけでなく、構成や登場人物、人物像、主題、文体など多くの共通点や相違点などを見出すことができる。原点であるシラーの詩『人質』との相違点について、高根沢ら

*糸魚川市立糸魚川中学校

(2018)は「話の流れはほぼ変わっていないものの、フィロストラトスが忠僕から石工へ変更されたこと、冒頭場面、走ることを放棄する場面、ラストの頬を打ち合う場面と少女が緋の衣をささげる場面の加筆」がある点を指摘している。原作と、太宰の『走れメロス』を比較することによって、加筆された点に気づき批評する際の観点を設定しやすいということ、作者はなぜこの表現や言葉、場面を入れたのか、意図を考え分析することにつながると思う。特に、結末の少女が緋のマントをメロスにささげ、ひどく赤面する場面について分析することは、『走れメロス』の主題にかかわる問いとなり、作者の意図を考えることにつながるはずである。

(2) レーダーチャートを用いた読みの観点の明確化・・・作品を、観点を立てて分析する。

単元のスタートに、これまでどんな文学作品を学習し、どんなことを学習してきたのか、既習事項を想起した。文学作品を読むうえでどんな観点があるのか確認し、自分で観点を設定して批評文を書く活動をするを予告し、見通しを持たせた。批評文を書く際には、どんな観点をもって自分が作品を分析したのかがレーダーチャートのグラフに書き記されることにより、自分の読みがより明確になることを期待した。

(3) 自分の解釈を交流する対話活動・・・作品の根拠を明確にして分析する。

松本・桃原ら(2020)は、「文学の授業では、解釈形成とその交流がともに重視されなければならない。」と述べている。そこで、作品の比較から考えた課題の解釈や答えを自分で考えるだけにとどまらず、仲間と交流し、全体で共有するという対話活動を位置づけた。鶴田(2010)は、単にテキストに根拠を(情報の取り出し)を求めるだけでは不十分で、自分なりの理由(取り出した情報を解釈し、熟考・評価する)も加えることが必要であると中学校の授業場面を例示しながら指摘し、「根拠」と「理由」を分けて主張することの必要性を説いている。そこで、対話を活発にするために、比べ読みから出された加筆された場面や表現が必要か・必要でないか、納得できるか・できないか、という課題を設定した。主張・根拠・理由(解釈)に基づく対話活動を通して、意見を組み立て、発言しやすくなるであろうことを考えたからだ。交流を通して仲間の多様な考えに触れ、読みの広がりや深まりにつながることを期待した。

4 単元計画

(1) 単元名 『走れメロス』の批評文を書こう(『走れメロス』光村図書2年)

(2) 対象学級 新潟県糸魚川市立I中学校 第2学年5組

(3) 単元の目標

知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性等
作品の特徴や表現の効果について理解したり、理解・表現するために必要な語彙を増やしたりすることができる。	課題に対する考えを他者と対話することを通じて作品を評価・批評し、自分の考えを表現することができる。	仲間と考えを交流することを通して、多様な考えに触れ、文学作品を読む楽しさを実感することができる。

(4) 指導と評価の計画(全9時間)

次	時	○学習方法 ◇学習課題
1	◎ねらい：教材文『走れメロス』を読み、初読の感想を書く。	
	1	①◇教材を読み、初読の感想を書く。
	2	○今まで文学作品を通して学んできたことを想起し、文学作品を読むための観点について全体共有し、単元ゴールを知る。 ○教材文を読み、自分で幾つかの観点について選び、それに基づいて初読の感想を書く。仲間と感想を交流する。難語句を調べる。
2	◎ねらい：教材文の登場人物や時、場所、出来事などに着目し、作品の構成やあらすじを捉える。	
	3	②◇紙芝居のイラストを並べ変えながら、登場人物や出来事などの構成やあらすじを捉える。 ○自力解決→ペアで解決→全体共有→振り返り
3	◎ねらい：教材文と原作『人質』を比較し、共通点と相違点を捉え、追究したい課題について考える。	
	4	③◇教材文と原作『人質』を比較し、共通点や相違点を見つける。
4	◎ねらい：人物描写や会話、心内語などに着目し、「メロス」「王」の人物像やその変容、作品の主題について考えることができる。	
	5	④◇メロスはどんな男か？◇王は、どんな人か？
	6	◇メロスは何のために走っているのか？※課題をグループで分担して考え、仲間に説明する。
	7	○他の課題の班に説明→自班に戻り説明、振り返り ⑤◇メロスと王の人物像の共通点や相違点について考える。 ◇「もっと恐ろしく大きいもの」は何か、主題について考える。

5	◎ねらい：導入と結末の比較から、結末部分をなぜ作者は付け加えたか考え、仲間との交流を通して考えをまとめることができる。
	8 ⑥◇結末について納得できるか・できないか。なぜ、この場面やこの脇役を付け加えたのか。作者の意図を考えよう。 ○自力解決→ペアで交流→全体交流→まとめ
6	◎ねらい：今までの学習を振り返り、『走れメロス』の批評文を書く。
	9 ⑦◇今までの学習を振り返り、『走れメロス』の批評文を書く。レーダーチャートに評価し、観点を絞って批評文をワークシートに書く。 ⑧◇仲間の批評文を聞き、気付いたり考えたりしたことを書く。仲間と交流し、自分の考えをワークシートに書く。

5 学習者の学習の様相

(1) 4次の学習の様相

4次では、メロスと王の人物像、「もっと恐ろしく大きいもの」とは何かを考え、主題に迫るために、「メロスはどんな男か?」「王はどんな人物か?」「メロスは何のために走っているのか?」という問いを提示した。一つの問いについてグループ内で協力して考え、自分たちの考えを同じ問いについて考えたグループと違う問いについて考えたグループに説明し合った。さらに、「メロスと王の共通点と相違点」、「もっと恐ろしく大きいものは何か」を意見交流したあとに、三つの問いについて出された答えを関連させながら、「作品の主題」について考えた。

生徒N、生徒Hは『走れメロス』の主題を、「信頼」や「信じることの大切さ」であるとワークシートに記していた。「もっと恐ろしく大きいものは何か」を、「信じる心」や「信頼」と考えた学習者のほとんどが、主題をそのように捉えていた。

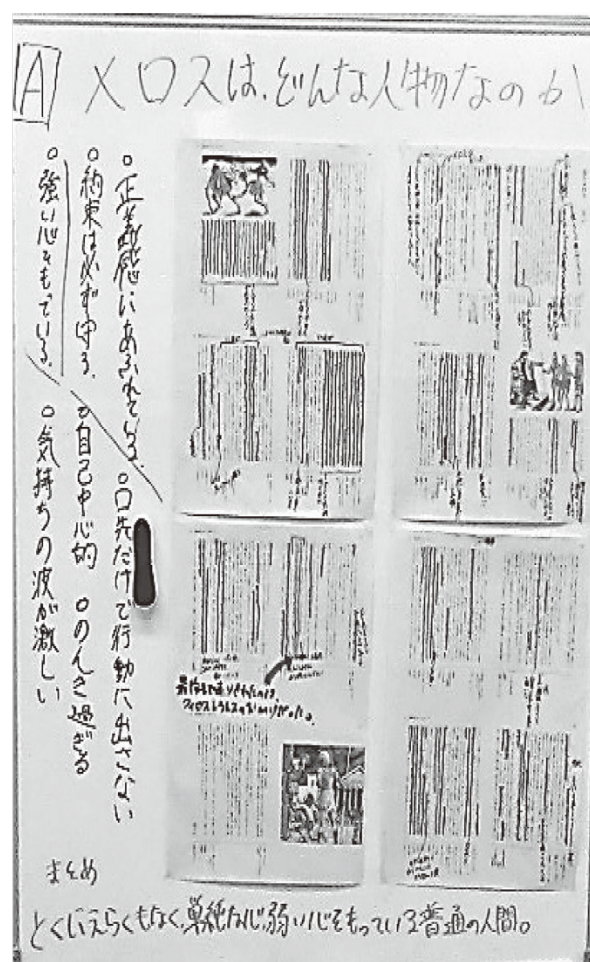
生徒Rは、前時の「メロスはどんな男か?」という問いで、「メロスも走るのを諦めかけて、王と同じ考え方になった」ことをワークシートに指摘している。また、王の人物像を考えたグループの発表を聞き、振り返りに、「王が邪知暴虐になったのは、裏切られたり、だまされたりした過去があったのだろうということが分かった。」と述べている。これらのことから主題を「どんな勇者と呼ばれる人たちにも、弱い心は存在する。そして、弱い心に勝つか負けるかで王になるか、メロスになるかが変わる。」と仲間の考えと自分の考えを関連づけて主題を導いている。

生徒Fは、前時の「メロスはどんな男か?」という問いで、「人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法」「愛も正義もくだらない」という根拠をあげ、メロスが途中走るのを諦めかけ、王と同じような考えになっていることをワークシートに指摘し、メロスを「単純で弱い心をもった男」と結論づけた。

(2) 5次の学習者の様相

5次は「結末部は必要かどうか」を自分で考え、ペアで交流し、その後全体で交流した。この問いは、『走れメロス』と原作『人質』を読み比べ、結末部が加筆されていることに多くの学習者が気付きとしてワークシートにあげていたものである。【A】は前時の終わりに、生徒Iが「老爺」と「少女」について、「生と死を表している」と発言し、その後各自で考えをまとめ、ペアトーク後の全体交流の一場面である。

【B】は、「勇者は赤面した」「メロスはまごついた」は必要かどうか、太宰が少女を登場させた意図についての意見交流である。



【図1】メロスはどんな人物か？

【A】 T：老爺のイメージは？ 生徒Y：寂しいというか、元気がない。 生徒I：死が迫ってきている感じがする。 生徒Y：老爺って暗い感じ。 生徒R：そうか。生徒Iが言ってたことと繋る。 T：結末部には「少女」が登場してくるよね。 なんで太宰は少女を登場させたんだろう？ 生徒M：王様を恐れていて何も言えなかったけど、これからは若い人でも、ものが言えるようになったんだっていうのを少女で表しているんじゃないかと思う。 T：それって国が平和になったってこと？女性も前に出てこれる世の中になったってことかな。 生徒（）：おー！ 生徒K：初めの老爺は死に近いイメージで、最後の少女は生きる感じ。 T：なぜ少女は生きるって感じなの？ 生徒K：若い人も前に出れる、明るい町になって。	生徒F：平和な町になってきたことを表してる。 T：なるほど。他の人の意見も聞いてみよう。Hさんどう？ 生徒H：私は、老爺と少女は必要だと思います。 過去と未来を表していると考えました。王様の独裁的で、腐り切った政治を老爺で表し、これからの平和で明るい政治、期待感を少女で表していると思います。 導入で、若い衆に話させなかったのは、若くパワフルな力がなくなっていくことを言いたかったのではないかと感じた。つまり、老爺と少女は町のシンボルとなっていると思う。 T：なるほど。少女と老爺は、対比されている？ 生徒（）：おー、そうか。 T：少女によって、未来への期待を表しているっていうことかな。少女と老爺は、そのときの町の様子を表す象徴として描かれているのかな。 T：メロスと少女はこの後どうなる？未来は？ 生徒Y：結婚、するかも。ははは
【B】 T：では、次に「メロスはまごついた」、「勇者は赤面した」というシーンは必要かどうか、意見を聞いてみよう！Nさんどう。 生徒N：えーっと、必要だと私は思います。メロスは、最初は「メロスは激怒した。」が「勇者はひどく赤面した」って変わっているから、メロスが成長したってことが分かる。でも、「まごついた」ってことは、勇者でもどんな人でもそういう感情があるってことが分かると思う。 T：なるほど。メロスでもどんな人でもそういう感情があるっていうことなんだけど、それはどんな感情？ 生徒K：恥ずかしい。	生徒（）：少女に裸を見られて。 T：なるほど。じゃ、なんで太宰は最後に「勇者は赤面した」を加えたんだろう？ 生徒R：勇者と書かれているけどメロスは普通の牧人で、勇気を踏み出せば人は勇者になれるのではないかっていうことを伝えたかった。 T：なるほど。他には？Fさんは？ 生徒F：誰でも完璧な人はいないってことだと思う。 メロスは途中諦めかけたけど、信じられているから最後まで走ることができたから勇者になって、勇者になったメロスも人間で弱い部分も強い部分も持っているってことだと思う。

【A】のスタートでは、生徒Iの発言を受けて、冒頭の「老爺」や終末の「少女」の言葉がもつイメージを言及し、「暗い」・「明るい」の対比されたイメージであることが述べられた。さらに、生徒Mでは、「少女」の登場する意義を言及している。老爺や少女が「生」と「死」の象徴であることを明確に説明できないが、生徒Hの「王様の独裁的で、腐り切った政治を老爺で表し、これからの平和で明るい政治、期待感を少女で表している」という発言で、「老爺」は「王の独裁政治」＝「国の死」、少女は「国の平和、未来への期待」＝「国の再生」を象徴しているということにも言及しているといえるだろう。さらには、「少女」とメロスの明るい未来をも想像することができ、太宰がこの結末を描いた意図を考えることができたといえるのではないだろうか。【B】では、生徒Nの発話から、導入の「メロスは激怒した」と終末の「勇者はひどく赤面した」とが対比されていることが明らかになり、この作品の中でのメロスの「成長」について言及している。また、「まごついた」「赤面」という描写に着目し、「勇者」であるメロスにも「恥ずかしい」という人間らしい感情があるということの気づきに繋がっていることが分かる。生徒R、生徒Fの発話からは、4次でそれぞれが考えた主題をもとに、「勇者は赤面した」「メロスはまごついた」を加筆した太宰の意図を考えていることが伺える。「誰でも完璧な人はいない。弱い部分、強い部分を持っている」というこの作品のメッセージを捉えていることが分かる。

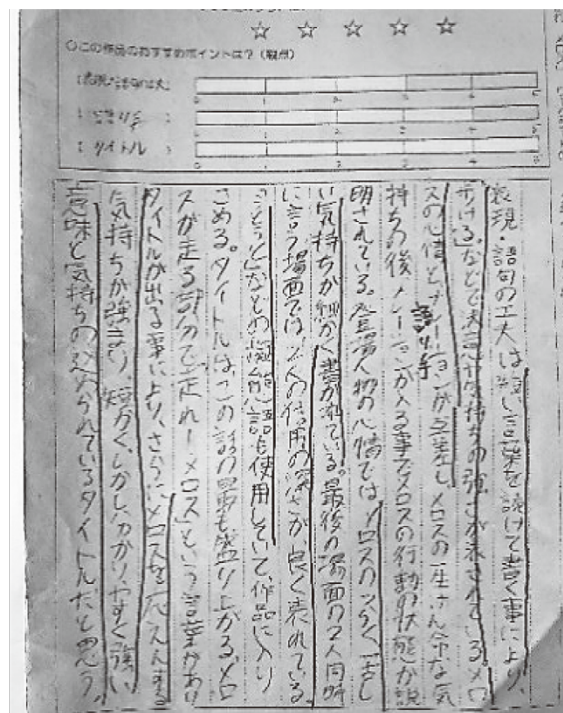
(3) 6 次の学習者の学習の様相

6 次では、課題解決によって批評文を書く材料を蓄積してきたことを振り返り、図3のように、『走れメロス』のおすすめ度を★の数で示し、作品のおすすめポイント（読みの観点）を自分で設定した。その観点を1から5で評価し、批評文を書いた。

以下は生徒Rが単元末に書いた批評文である。

○作品のおすすめ度★★★★★ ○主題：5 ○結末：5

①「走れメロス」は“人を信じることは”を教えてくれる作品です。メロスは、人を信じることを教えてくれる勇者です。二つの作品は最終的には友を助け出すという話ですが、②二つの作品の決定的な違いは「結末」という点にあります。メロスでは、最後に殴り合うシーンや裸のメロスに布を渡すシーンなどがあり、このシーンは人質にはありません。③このことからメロスの心のキレイさ、人としての温かさが伝わってきます。また、④「赤面」したことで成長し「勇者」になったメロスが、少女に裸を見られて恥ずかしがるという一人の青年に戻っていく様子も分かります。メロスは人を信じることの大切さや勇者も普通の人間なんだということが分かる作品です。（下線は筆者）



【図2】レーダーチャートと批評文

生徒Rは、『走れメロス』を下線部①と価値づけている。波線部②では、二つの作品と比較し、「結末」に着目し分析していることが分かる。波線部③では、不十分な表現ではあるが、加筆された殴り合うシーンから自分が友を裏切りそうになったことや友を疑ったことを正直に告白し合うため、「心のキレイさ、人としての温かさが伝わる」と分析している。また、「勇者は赤面した」からメロスを「恥ずかしい」という感情をもっている一人の人間に戻した」という太宰の意図を分析し、波線部④で言及している。結末を今までの学習を生かし分析しているも、「人を信じることの大切さ」を教えてくれる作品だと価値づけるには、波線部③、④の分析では不十分で論理が繋がっていないことが伺える。

次に、生徒Fの批評文を分析する。

○作品のおすすめ度★★★★★ ○主題：5 ○登場人物：5

①この作品は「心が強い人はいない。色々なことを乗り越えて弱い心を成長させる」ということを伝えようとしている。原作の人質は、捕われの身になってしまった友を助けるために走る、二つの作品の共通点がこれだ。しかし、二つの作品の違いは、メロスの成長だ。人質の主人公はあまり心が成長していない。走ってセリヌンティウスを助けているだけである。②「走れメロス」は途中、心の弱いメロスだったが、友を信じることや真実がこの世に存在することを証明するために走ることでメロスの心は強く成長していく。「走れメロス」は、③完璧な人はいないと伝えてくれるだけでなく、弱い心は誰でも持っていると教えてくれる作品だ。（下線は筆者）

下線部①でこの作品の主題について触れ、4次で学習したことが生かされていることが分かる。二つの作品の違いは「主人公の成長にある」と分析し、波線部②では、『走れメロス』の主人公の成長を4次や5次での交流をふまえていることがわかる。波線部②から下線部③「完璧な人はいないと伝えてくれるだけでなく、弱い心は誰でも持っている」と教えてくれる作品だ。」と価値づけ、主題と主人公の成長を関連付けて述べられている。しかし、作品からの叙述を根拠として述べておらず、そこを明確にするとより良い批評文になったといえるだろう。

次に生徒Nの批評文（抜粋）を分析する。

○作品のおすすめ度★★★★★ ○表現・語句の工夫：5 ○登場人物の意味：5

「走れメロス」は①登場人物に大切な意味があり、何度読み返しても、とても面白く、深い作品だ。初めと終わりに登場する「老爺」と「少女」は同じ脇役という点では関連性がある。しかし、この二人には、全く反対のイメージがある。②「老爺」で死に近い悲しい暗い国を象徴して、最後の場面では「少女」で若く、元気で未来のあ

る国を象徴している。国はメロスによって暗い時代から明るい時代へと変化しているのだろう。この作品は、このことから対比の面白さを教えてくれる。(中略) ③「少女がメロスに緋のマントを捧げる」シーンからは、少女とメロスの間に何か良いことがあるのではないかと想像でき、温かい気持ちにさせてくれる作品だ。(下線は筆者)

今までの学習の蓄積から『走れメロス』を下線部①と評価している。生徒Nは、原作『人質』との比較による気付きから「脇役」という登場人物に着目し、波線部②にあるように「老爺」と「少女」のイメージを比べ、この国の変化を分析している。これは、5次の交流において生徒Mや生徒Hの考えから、自分の読みを深めていることが分かる記述だといえる。下線部③「緋色のマント」をメロスに捧げる「少女」の描写や5次の【B】の生徒Yの発話への共感からメロスとの明るい未来を想像し『走れメロス』は「温かい気持ちにさせてくれる」作品であるという評価を述べている。最後に生徒Hの批評文を紹介する。

○作品のおすすめ度★★★★ ○情景・色彩：4 ○メッセージ性：5

太宰は、「人質」にはない最初と最後のシーンを付け加えている。老爺が登場し、日没後の暗い闇や「やけに寂しい」「ひっそりとしている」街の様子が表れている。これに対して、最後のシーンは少女が登場し、夕日の沈む中、緋のマントを捧げ、群衆の間に歓声が起こっている。②対比されるシーンを付け加えることで、街の様子や色彩のイメージを与えてくれる。また、「少女がマントを捧げ」、「メロスが赤面した」ところは③勇者のメロスも私たちと同じ普通の人間であり、私たちも何かでヒーローになれるかもしれないという共感と希望を呼ぶ効果がある。「走れメロス」はメロスを通して、④「誰でもヒーローになれる。完璧な人はいない」というメッセージを、顔の表情や色彩で訴えている作品だ。(下線は筆者)

5次の【A】の交流での「老爺と少女は町のシンボルとなっている」という発話や最初と最後の場面の色彩表現や登場人物の表情を比べて分析していることが伺える。さらに、波線部③「勇者のメロスも私たちと同じ普通の人間であり、私たちも何かでヒーローになれるかもしれないという共感と希望を呼ぶ効果」があると独自の解釈を述べ、下線部④と評価している。以上のことから原作『人質』と比較したうえで明確になった観点をもとに分析し、独自の解釈で作品を評価した批評文となっていることが分かる。また、生徒Hは「私の中で新たな視点を見つけることができた。人物の性格や行動ではなく、物語の中での効果や役割を捉えることだ。これは他の物語にも通じることだと思う。(中略)このように細かい表現を見たり(まま)、全体から考えてみることを学ぶことができた。他の文学作品でも同じようにみたいと思う。」と単元末に振り返り、今回の学習の成果が読み取れる。

6 成果と課題

原作『人質』との比較、仲間との対話活動を取り入れた学習デザインは、作品を分析することや根拠をあげて自分の考えや解釈を説明すること、加筆した作者の意図を考えることができたこと、5次の学習者の様相からいえるだろう。また、生徒の批評文から中学2年生の時点で批判的思考力や分析する力の向上を実感することができ、有効な学習デザインであったといえる。さらに、自分の読みの分析の観点をレーダーチャートに設定し評価することにより、その観点を意識しながら批評文を書くことができ、自分の読みの自覚化や新たな読みの観点の獲得に繋がったことも成果の一つである。

しかし、批評文を書く段階になると、作品を価値づけ評価するということに至らない学習者がみられた。また、批評文は自分独自の読みを、根拠を交えながら誰もが納得できるように客観的にかつ論理的に述べなければならない。今後はこれらの力が向上するような学習デザインの工夫や他の単元との関連を図り、批評する力を育てていきたい。

参考資料

文部科学省 「中学校学習指導要領(平成29年度告示)解説 国語編」 東洋館出版, 2018

高根沢紀子・吉田愛里 「太宰治 「走れメロス」の読まれ方：研究と教育にあいだ」 『立教女学院短期大学紀要』

50巻, 立教女学院短期大学, 2018

松本修・桃原千英子 「中学校・高等学校 その問いは、文学の授業をデザインする」 明治図書, 2020

鶴田清司 「対話・批評・活用の力を育てる国語の授業－PISA型読解力を超えて－」 明治図書, 2010